
不器用な二人

はぐれ会長

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

不器用な二人

【Nコード】

N0814Z

【作者名】

はぐれ会長

【あらすじ】

繰り返される戦争によって、地上に住むことが叶わなくなった人間たちは、上へ上へと目指し、空中に浮遊する機械の島を作り出し、そこに居を構えるようになった。

しかし前よりも狭くなった自分たちの世界に、人間が納得するハズもなく、様々な目的でやはり戦争は繰り返される。

大国に狙われ、窮地にある一つの国は、最終手段として新たな試み 人体改造に乗り出す。

その第一号に選ばれた孤児院の少年 『テンザ』は、国の機密施

設に連れて行かれ、数年後失敗したとして故郷の地へ戻される。

戦争を繰り返す国を国民は嫌悪しており、テンザは国のスパイ疑惑をうけ、忌み嫌われる。しかしそんな中、一人の少女だけはテンザのもとを幾度も訪れる……。

機械弄りに没頭する嫌われ者の少年と、彼を理解してやれる少女の、切なさ乱れ撃ち純愛物語です。

*一応連載投稿のカタチをとっていますが、章分けしているだけで実質短編のようなものですので、すぐに読み終わるかと思えます。お気軽にご覧くださいませ。

通じ合う二人の日々

地上時代の産物 風車のある町として、少しばかり観光客を集めていた辺境の町『サトウール』

しかし今は、そのささやかな繁栄は見る影もない。

なんのことはない、サトウールの存在する国が大国に目をつけられたのだ。

この国は面積こそ小さく、小国であるものの、地上から移植した山より貴重な資源が多く採取でき、貿易によって中心都市は大国に負けないほど繁栄している。

けれども、数年前外交を誤り、大国に侵略の対象とされた。

当然、辺境であってもサトウールも戦争中の国の町であることに変わりなく、観光客の類はぱったりと見えなくなった。

それだけで、町から活気が失われているように感じる。

くわえての厳しい taxation によって、町には閑散とした、あるいは殺伐とした雰囲気すら漂っている。

そんな辺境の町サトウール。そのさらに端の端。高くそびえる鉄の壁を越えれば、遙か地上へと落下してしまうというまさにこの国の隅。

追いやられたようにポツンと一つの建物がある。

それは家というにはあまりに不気味で、屋根からは無数のアンテナのようなものが伸びており、窓にいたっては一つもない。

そんなおかしな建物が、青年『テンザ』の住居だった。

テンザは時折町の商店に食物を買い求めては自宅にこもり、日がな一日家で機械を弄くっていた。

町の住人はそんなテンザのことを気味悪がり、誰も自分からは近

づこつとしない。

それどころか、嫌がらせをしたり、陰口を叩くものがほとんど。勿論それは、テンザがおかしな生活をしているから　という理由だけではないのだが……。

「よし、こんなもんか……」

テンザはかけていた　パイロットがつけるような大仰なゴーグルを外し、一息つく。

髪は男子にしては少し長めだが、ひどい癖っ毛で視界を遮ることはない。

身にまとっている服も普通の町民のそれとは異なり、少し奇抜なガラものの服装。

しかしそれが妙に似合って見える、住居と似てやはり変わった青年だった。

テンザは機械弄りに小休止をうつと、台所へ向かう。

と言っても、家の中はガラクタと見紛う金属部品が散乱しており、どこが居間なのか台所なのかわからぬ惨状だったが。

「ん……？」

テンザは冷蔵庫を開けて、その中身に首をひねる。

「まずい、夕食の材料を切らしたか」

物覚えもつかぬ内に両親に捨てられ、孤児院で育ったテンザは、青年になった今も当然のように一人暮らしのため、食事は自炊しなければならぬ。

「面倒だけど……出かけるか」

自分に言い聞かせるようにしてそう口にする、テンザは財布をポケットに突っ込み、家を出る。

テンザの家から町まで、歩いていけば一時間以上かかる。

とても気軽に行ける距離ではない。

一時間もかけて、自分を忌み嫌う人間のところに食物を要求しに

いかなばならない。

それが易々と実行出来るほど、テンザは出来た人間ではない。

しかし片方の枷　　時間の方を解決する術を、テンザは持っていた。

大型のバイクを自分で勝手に改造し、簡単な屋根付きの高速移動手段としているのである。

荷物を置くスペースも設けているため、買いだめを基本とするテンザのライフスタイルにもマッチしているのである。

自分で作ったため、当然といえば当然だが。

愛用の乗り物に跨り、テンザは薄く笑う。

「ふふ、コイツなら10分とかからないぜ……」

大国の軍需施設並みの科学力と知識でもって作られたそのマシンは、外見は不可思議ながらも、性能は超一流……いや、それを凌駕しているといえる。

テンザがエンジンをかけてしばらく、マシンは動き出し、際限なく加速し、そして……

「ヒヤッホウ！」

テンザの軽快な叫びと共に、マシンは跳躍し空を飛ぶ。

あらゆる建物、人々を見下ろし、テンザは風を切って商店を目指した。

「ふう……」

愛用のマシンを近場に止め、テンザは商店を目指す。

中心都市こそ近代化が進んでいるものの、辺境であるサトゥールは昔ながらに露店によって必要な買い物を行う。

「おい、この売れ残ってるもんを全部くれ」

テンザは八百屋の前で立ち止まり、店主にそう一声かける。

テンザの買い物は悪く言えば適当、良く言えば豪快で男らしい。

作るメニューなど細かに考えず、ただある物で作る。

それは趣味の機械弄りにもいえることだった。

「……おい、聞いているのか」

閉店間際に現れた客、しかも残っているものを全部買おうと言っているのに、店主の顔は不服そうだ。

テンザの催促にやれやれと腰を上げ、

「自分で適当に積み込みな」

そう言っつて接客を放棄するのであった。

しかしそれはテンザにとって慣れたこと。

無言で愛用のマシンの中に野菜を詰め込んでいく。

「金は払ってけよ」

「当然だ」

テンザは財布から乱暴に札を引っ張り出して店主に握らせる。

「けっ、とつとと帰りやがれ、この国家のスパイが！」

おおよそ客に向けるものとは思えない暴言を吐き捨てて、店主は店の奥へと消えていった。

そんな一方的なやりとりが、数十分の間に何度も行われた。

テンザは、ただ町を出歩くだけで罵られ、いわれのない罵声を浴びせられた。

どこのお店に行っても、対応は酷く、売ってもらえない時すらあった。

それでもテンザは文句一つ言わず黙々と買い物続ける。

ここ以外に、食物を得る手段はなかったから。

食物がなければ、当然死んでしまう。

テンザは湧き上がる様々な感情を押し殺し、封じ込め、淡々と目的を達成していく。

「最後は……」

趣味の機械弄りにも、愛用のマシンにも必要な、燃料だった。

この国で産出される燃料。それは当然、戦に重要なもので、その価格はかなり高騰している。

「この金で、買えるだけの燃料をくれ」

テンザが財布から出した札束は、その高価な燃料でも充分な量が

手に入る額だった。

……しかし、

「んー？ てめえ、国のスパイじゃねえか！ 税込だけじゃまだ足りねえってのか！！」

ガラの悪い店の男は、テンザの差し出した札束をはたき落とした。バラバラと散らばる札束。

テンザは一瞬獣のように男を睨みつける。

「なんだ、その目は！」

しかし男のその言葉に我を取り戻したとでもいうように、すぐ視線を伏せ、屈み、札を広い集める。そして、

「頼む、この金で買えるだけの燃料を譲ってくれ」

「ああー？ てめえ聞こえなかつたのか！？」

男がテンザの胸倉を掴みあげる。

身長にこそ大きな差がないものの、取り立ててがたいが良いわけでもなく、格闘技の心得もないテンザには、勝ち目のない相手である。

だからこそ、テンザは下に出るしかない。

「燃料が必要なんだ。頼む」

胸倉を掴まれたまま、頭を下げる。

「戦争に使う燃料なんざねえんだよ！ これは、俺達町人が寒さをしのぐための」

「ちよつと！ 何してるんですか！」

今にも殴りかかりそうな男が、突如響いた鈴のような美声に動きを止める。

「ル、ルカちゃん……」

男は急に困ったような顔を浮かべ、テンザを解放する。

その男の視線の先には、一人の少女。

素朴な身なりをしているが、顔立ちは整っていて、スラッとしたスタイルにロングヘアがよく似合っている。

第一印象に悪いものは決して抱かれないうという、綺麗で親

しみある少女だった。

そして事実、少女「ルカ」は町の人気者だった。容姿の良さもあるが、なんととっても人当たりの良さ。

孤児院の出身にも関わらず、誰かを慈しむということを知っていて、明るく笑顔を振りまく彼女は町中のみんなから慕われていた。

そんな彼女に一喝されてしまったのは、男も引き下がるしかない。

「一体どうしたというのですか、町人同士で争いなんて……」

「こ、このガキがよ……金もねえのに燃料をくれなんていいやがるから……」

真つ赤なウソだったが、テンザは何も言わない。いや、言えない。ここで本当のことを言ってしまうっては二度と取引が出来なくなるからだ。

「そうなのですか？」

ルカの視線がテンザをとらえる。

「……………」

テンザは何も答えない、無言の肯定。しかしそれでもうんとは言わないことが、テンザに出来る唯一の抵抗だった。

「テンザさん、お金はあるの？」

ルカがテンザの名を呼ぶ。

この町で、いや、この世界で、テンザのことを名前で呼ぶのはルカだけだった。

「ああ、実は……ある。だからこの金で、買えるだけの燃料を譲ってくれ」

テンザは右手に握っていた札束を男の前に差し出した。

「は、初めから出しゃがれってんだ……」

男はそれを乱暴に受け取ると、一枚一枚数えて、金額分の燃料を容器に入れて手渡した。

「ありがとう」

テンザは感情のこもらない声でそう言うと、自分のマシンを目指して真つ直ぐに歩いた。

「おじさん、あまりテンザさんを疎外してはいけませんよ」

「えっ？」

ルカの一言に、しどろもどろになる男を置いて、ルカはテンザの後を追いかけた。

「……帰るか」

テンザはマシンに跨り、買い忘れがないかをよく確認し、エンジンをかけようとした……その時。

「待ってよ、テンザぁー！」

快活な声。

後ろを振り向くと、ブンブンと手を振りながらルカが近づいてきている。

「まったく、テンザってば足速いんだから……」

小走りで近づいてきたルカは、テンザのマシンに手を置いて、軽く呼吸を整えている。

「……待てなんて言ってたか？」

「言ってなくても、折角会ったんだからさ、一緒に行こうよ」

そして屈託無く微笑むルカ。

町人たちに振りまく愛想のものではなく、心からの笑顔。

「……ちゃ、ちゃんとつかまっとけよ。お前風で飛ばされちまいそうだからな」

その純真さに、テンザは少し顔が赤くなってしまふ。それを悟られぬよう、ルカを早々にマシンの後ろに跨らせる。

「だいじょーぶ 慣れてるしね」

町での他人行儀さが嘘のように、ルカは親しげにテンザへと笑いかけ、その背中をぎゅっと抱きしめるのだった。

そしてテンザはエンジンをかけ、車輪が轟音と共に回転を始める

そして、二人を乗せてマシンは空へ跳ぶ。

「あははっ、いつ乗っても最高に楽しいね、このテンザのマシン」
背中を両腕でがっしと抱きしめながらも、両足を外に伸ばして快

適そつにするルカ。

「で、これもいつも思っただけど、これどうやって飛んでるの？
てか、車輪がついてる意味あるの？」

笑っていたかと思うと、次は不思議そうな顔になってかかとでコンコンとマシンをノックするルカ。

「車輪は、跳ぶまでの加速に要んだよ。高速で走ること生まれる勢いを使って、小さな斜面でも滑走路の原理で跳躍する。それからギアを切り替えて燃料を」

「あーもーわかんない。メカオタクさんの話はてんでわかんないよ……大分わかりやすく言ってやってたのに、じゃあ聞くなよ」

わからないと言いつつも嬉しそうなルカに、ぶっきらぼうな口調ながらも悪い気はしていなさそうなテンザ。

二人は、あらゆる面で対極にいなながらも、同じだった。

「……まーた町の人たちに難癖つけられてたの？」

しばし風を受けて楽しんでいたルカが、唐突に話題を切り出す。「町に買い物来る時はあたしに声をかけてって言ってるじゃない。そしたらあんなことされずにすむのに」

ルカは怒っているような口調で言う。だがその怒りは勿論テンザに向けてではなく、町人たちに向けて。

「いいんだよ、慣れてることだし」

「テンザが良くてもあたしが良くないの！ あーもームカつく、テンザのこと何もわかってないんだから！」

ルカは自分のことを思っただけで怒ってくれている。

それがテンザは、表面にこそ出さないものの、嬉しくもあり、むずがゆくもあった。

「テンザのこと国のスパイとか言ってさ、そんなわけないじゃん」
国のスパイ……テンザが忌み嫌われる原因となっている事件によりついた事実無根の言いがかりである。

数年前のこと、まだテンザもルカも幼く、孤児院に入っていた時のこと。

サトウールのあるこの国は、大国との戦争に勝つため、先進国に負けぬ科学力を駆使して人体改造という手段を試みた。

孤児院から適当に相性の良さそうな年代の者を選び、機密施設にて改造をほどこす。

それは……結果から言うと失敗に終わった。

テンザはその時の記憶を抹消され、故郷の地へと戻された。

その頃にはもう少年と呼べるような歳ではなく、青年となっていたが。

しかし変わったのは年齢や背丈だけではない。町人たちの自分を見る目が変わっていた。

人体改造なんていう前代未聞の行為に挑戦しようと考えるほど、この国の勝利は絶望的　　追いつめられていたのだ。

当然、辺境の町においても、税収が厳しくなる。

長い平和になれていた国民たちは、国に対して反感を抱くようになった。

しかし武力による統括がある以上、反乱することも出来ない。

そんな一触即発ともとれる町に帰ってきたのがテンザである。

国から改造をほどこされ、監視の役を請け負っているスパイだと疑われ、煙たがられた。

それが今の状況である。

それでも、テンザにはルカがいた。

同じ孤児院にいたルカだけは、テンザの味方をしてくれた。

それだけでテンザは、どんな理不尽にも立ち向かっていけるのだった。

「なあ、今日はまた泊まるつもりなのか？」

テンザが後ろにいるルカにたずねる。

今向かっているのは当然テンザの自宅。この時間からだ、町に住居を構えるルカに帰る余裕はない。

「うん、そうしょっかな」

ルカは着の身着のまま、何も持つてはいなかったが、それも問

題のない話だった。

頻繁にテンザの家をおとずれるルカは、テンザの家の一角に、自分の着替えや身だしなみセットを置いてあるのだ。

「久々のテンザのおうち」 胸……躍らないね

「そう思うんならどうしてついてきたんだよ」

「あはは、冗談だよ。確かに、どうせまた散らかってるんだろーとか、燃料くさいんだろーとか、ガラクタの相手ばかりしてあたしを無視するんだろーとか、ちよつとだけ不満はあるけどね、全然気にしとないよー」

「……すまん、善処はしよう……」

テンザは殊勝に己の非を認め、頭を垂れるのであった。

「うわあ……予想以上だよこれ」

ルカは部屋に入るなり不満の声をあげた。

「ちよつとは片付けようよ……これとか、いるのコレ!? こんな穴のあきまくったタイヤ」

「それは俺のマシンの具合が悪くなった時の補填パーツだよ。穴なんて塞げばいい話なんだから」

ルカは、まさに足の踏み場のないテンザ宅を、おっかなびっくり進んでいく。

そして、一つのタンスの前で止まる。

「中身、勝手に見たりしてないでしょーね?」

「ばっ、してねーよそんなもん!」

「そんなもんとはなによ! これでも町一番の美少女って評判なんだから」

「この町ジジイばつかだからな、視力わりーんだろ」

サトウールには中年より若い15歳以上の男は、特殊な事情を持つテンザ以外にいない。

皆兵士として戦に駆り出されているのだ。

「ひつどーい、なにその言い方」

「大丈夫だ。そのうちあのオヤジどもも連れて行かれる」

それほどまでに、この国の危機は近づいているのだ。

「そのの何が大丈夫なの？」

「だから、そうなったら誰もお前を町一番の美少女なんて言わなくなるだろ？ だから、妥当な評価に落ち着く」

「妥当な評価って？」

「……や、その……可愛い女子、ぐらいの　　って、うわ！　やめる！」

テンザが顔を背けながら、呟いたその一言に、ルカは顔を真っ赤にして抱きついてくる。

「わーい、テンザがデレたー！　ようやくあたしの魅力がわかったのねえ」

「い、いいから離れる！　バランスが崩れ……あ、ああああああああああ……！」

「きゃあああー！」

ドンガラガツシャーン！　と、喜劇でしか聞けないような音をたてて、二人はガラクタの山に沈む。

「いったーい！　なんでこんなところにタイヤがあるのよ！」

「それは雨漏りした時に屋根を塞ぐためだ」

「なにその地味な使い方！　全部機械弄りのパーツじゃないんかい！」

「口調がおかしくなってるぞ」

やいのやいのと言いながら、二人は立ち上がり、

「んー……テンザ、そろそろご飯にしようか」

「唐突だな」

しかしテンザも空腹なのは事実であったので、二人がかりで外にとめてあるマシンから食材を運び出す。

「まさに買いだめ！　これぞ、ザ・買いだめ！」

「意味がわからん」

食材を運び終えたところで、テンザが台所に立つと、

「いいよ、今日はあたしがやる」

「え、いいのか？」

「まかせときなさいって！ 二週間ぶりくらいだからね、また上達したあたしの腕を見せてあげるよ！」

基本的には週に数回顔を合わせる二人だったが、こここのところはど
うしてか間が空いていた。

なので二週間……なのだが、これだけの期間でも、本当にルカは
料理の腕をあげてくる。

それをテンザは知っていた。

テンザも毎日自炊なので、料理が下手なわけではないが、ルカに
はかなわない。

正直、毎日でも食べていたくらいに美味しいものだった。

そして二週間も空いたとなると、またレパートリーがグッと増え
ていることだろう。

一体どんな料理を作ってくれるのか、それを考えるだけで、テン
ザは腹の虫が騒ぎ出すのを感じていた。

「そんじゃー、お任せする」

テンザはルカにそう言っつて、自分の作業部屋へと入っていく。

後ろからは早くもトントンと小気味良い包丁のリズムが聞こえて
きていた。

「さつてと……」

テンザはゴーグルをはめ、両手に機材を掴んで、作業を始める。
時には削り、時には熱し、時には溶接しながら、ガラクタにしか
見えないものを組み合わせさせて何かを作っていく。

今朝の続きだった。

「んー……ここはどうするべきか……」

アレコレとパーツを取り出してきてはうんうん唸って、作業を進
めていく。

一体何を作っているのか？ それはルカにもわからない。テンザだけの知るところであった。

「ここをこうして……」

テンザが作業に取り掛かってから40分ほど過ぎたころ。

「……よし！ これでとりあえず完成のハズ」

「出来たよー！」

テンザが背筋を伸ばしてゴーグルを外したのと、ルカが料理の完成を告げたのはほぼ同時だった。

「これも長年の付き合いのなせる技か？」

テンザはそんなことを呟きながら、まだ見ぬご馳走に思いを馳せるのであった。

「じゃーん！ どうだ、めーしあーがれー」

「おお！」

ルカが小躍りしながら食器を食卓に並べていく。

そのどれもが色鮮やかに盛り付けられ、とても豪勢、それでいて旨そうに見える。

テンザは思わずよだれが出そうになるのを、慌てて飲み込んだ。

「メインディッシュはちよっぴりのひき肉と、じゃがいもをふんだんに使ったハンバーグです」

「うん、すごく旨そうだ」

俺が同じ食材を渡されても、決して同じものは作れないだろう。

ハンバーグの周りに添えられている野菜たちも、レタスを中心にキュウリのスライスやプチトマトなどが並べられており、見た目にも美しい。

テンザは食卓につくなり、早速箸を手に取った。すると、

「あ、待って。今お茶入れてあげるから。コップ出して」

言われるがままテンザは自分のコップを差し出し、ルカにお茶をそそいでもらう。

「さんきゅ」

「いえいえ」

上機嫌なルカ。甲斐甲斐しく気を利かしてくれるルカの優しさが、テンザはこれ以上なく心地よかった。

「それじゃ、いただきます」

パチンと両手をうつて食事前の挨拶をするルカを見て、テンザも思い出したように小さく「いただきます」と言っ、二人は食事にとりかかった。

「旨い」

一口食べて、即座に発したテンザの素の一言は、ルカをこれ以上なく上機嫌にさせた。

「でしょでしょ？ 実は隠し味を入れてるんだけど、わかるかな？」

「わからん、が、旨い」

黙々と一心不乱に食べ続けるテンザ。

「ちよつと、そんなに急がなくても食事は逃げないよ！」

「いや、旨いし」

テンザは言いながらも味噌汁の入ったお椀に手をつけ、ズズズとすすっていく。

「これも旨いな……」

「もう、さつきからそれしか言っていないじゃない」

そんなテンザの様子を、幸せそうに見守るルカ。

「……お前は食べないのか？」

ふと視線に気づいたテンザが、ようやく手を止め質問する。

「食べるよー、勿論。でも、今はテンザを見てたいかなって」

「……変な奴だな」

「あはは、テンザにだけは言われたくないよー」

テンザは再び食事に戻り、ルカもそれからしばらく眺めた後、ようやく食事を取り始めた。

「あー、何か久々に人間らしいもん食った気がする」

「何言ってるの、テンザも結構料理上手じゃない」

「いや、俺の飯はなんつーか……腹を満たすためだけのものであって、そこに楽しみの要素は一切ないから」

「ふうん……結構おいしいと思うけどナ」

後片付けもルカにすっかり任せてしまっている。

いくら食材が俺もちだからと言って、色々やってもらいすぎだろ
う。

せめて出来る恩返しは……

「おいルカ。明日は久々にドライブでも出かけるか」

ドライブというのは勿論テンザ愛用のマシンによる空のドライブ
なのだが。

「えっ、ホント!? いくいく! どしたの急に、いつも燃料が
もつたいないとか言って中々してくれないじゃない」

「ま……たまには、な。気まぐれって奴だ。今日はお前のおかげ
で燃料が手に入ったわけだし」

「あたしは何にもしてないよ。でも、ありがと、テンザ」

「……おう」

ぶつきらぼくに返事をして、そそくさと作業部屋に向かうテンザ。
そして部屋からさつき完成させたばかりの金属物……避雷針のよ
うななにかを手に自宅から出ていく。

「どこいくの?」

「完成したもんをちよつと取り付けにな」

ルカの問いに答え、テンザは梯子を使い屋根上へ。

そして作業すること十分。

「これでよし、と」

「わっ、また変なの付けてるし」

いつの間にか後片付けが終わったルカが、外に出て下から見上げ
ていた。

「ねーテンザ、それって何の意味があるの？ アンテナみたいなもの？」

「まー、そんなようなもんだ」

お互いのことならほぼ何でも把握している二人だったが、テンザのこの機械弄りに関してだけは、ルカも良くわかっていない。

何か深い意味があるのか……それとも弄くことに満足しているだけで、見かけどおりただのガラクタだったりして。

ルカは少し考えてみたが、すぐにやめた。テンザは変わり者だが、優しくて自分の大切な人だ。それがわかるだけで充分だったから。

「じゃーもう、今日は寝るか」

テンザは梯子を降りながらそう言った。

「うん、そうだね」

ルカもそう返して、部屋の中へ入っていく。

人々は空中で生活しているため、陽が最も近づく時間に睡眠をとる。

外に出ても暑くて行動しづらいからだ。

そのため、夜は寝汗をかきやすい。よって体を洗うのは朝が一般だ。

「じゃー、お休み」

テンザはガラクタの上にした布団の上に横になってそう告げる。

「うん……」

ルカは、自分のタンスの近くの片付けられたスペースに布団を敷いて横になっていた。

しばらく沈黙、後。

「ねえ」

ルカが静寂を切り裂いて声をかけた。

「ん？」

かろうじてまだ起きていたテンザが、それに応じる。

「今日はさ、一緒に寝てもいい？」

「はあ？ 一緒に寝てるじゃねーか」

「そうじゃなくて……一緒に、布団、で」

「どことなく甘えた声で言うてくるルカに、テンザは軽いパニックを起こす。

「は、はあ！？ そ、そんなお前、ガキじゃねーんだから……」

年頃の男女が、そんな……。

パニックるテンザに、ルカはもう一度繰り返す。

「一緒に布団で寝ちゃ、ダメ？」

「う……」

不純なおいがするが、断る理由は……ない。

「べ、べつにいーけどよ……」

「ホント？ じゃあ、そっち行くな」

「え、な、何でだよ。こっちは色々パーツの上に敷いてるから微妙にゴツゴツしてんだよ。そっちの方が」

テンザが喋ってる間に、ルカは自分の布団を抜けて、隣にやってきた。

「いいの、こっちの方が。なんか、テンザっぽいし」

「……んだよそれ、意味わかんね」

「えへへ」

テンザは今横向きに寝て、ルカに背を向けている状態だが、彼女のはにかんでいる様子がありありと浮かぶ。

何か、こっちだけドキドキさせられっぱなしで悔しいな。

何が悔しいのかはテンザにも全然わからなかったはが、自分からも行動を起こしてみることにした。

「っ！？」

ルカが小さく声をあげる。

「て、テンザ……手……」

「しらね、お休みな」

テンザは後ろ手にルカの右手をぎゅっと握って、そのまま眠るの

であった。

「も、もう……寝づらいよう……でも、テンザの手暖かい……」
ルカの意識も穏やかな眠りに誘われていく。

そして意識の落ちる寸前、

「大好きだよ、テンザ」

ルカの消え入るような呟きは、眠っているテンザの耳に届いたのかどうか。

確認するよりも前に、ルカも深い眠りへと落ちていった……。

そして、翌日。

「おっしゃあ！ 飛ばすぞ！ しっかり掴んどけ！」

「うん！ 絶対離さないよ！」

テンザの家の前には、マシンに跨る二人の姿があった。

「行くぜ！」

テンザが掛け声と共にエンジンをかける。

轟くエンジン音。そして回りだすタイヤ。

ちよつとした上り坂の、その頂点で 跳躍する！

どこまでもどこまでも。

「気持ちいいーいー！」

ルカの絶叫に似た歓声。

テンザも心なしか楽しそうである。

「すごい、町一面が見渡せるね」

「当然だ、俺のマシンはどこまでも飛んでいくからな」

二人の下に広がる町並み人々。

そして二人の気分も徐々に落ち着いてきたところで、テンザは右手を自分のポケットにつっこんだ。

そのまま、ポケットに入っている小さな箱のようなものを掴む。

「あ、ああ、あのさ、ルカ……」

自分でも心臓が異常に高鳴っているのがわかる。

実際に箱を握ったら、さっきまで割と平常心だったのが、急に崩れ、緊張が怒涛の如く押し寄せてくる。

まずい、まずいなあ……

テンザの緊張の原因は勿論この小さな箱。そう、まるで中に指輪でも入っただけいな。

「なあにテンザ、やけに声震えちゃってるけど」

「い、いやその……お、お前は俺のこと嫌いか？」

「へ？ 何言ってるんの、嫌いなわけじゃないじゃん。むしろその……うん、す、好きだよ」

「ま、マジか!？」

ルカの言葉に、テンザの動悸はさらに高鳴り、激しくなっていく。

「テンザは？ テンザはどうなの？」

「お、俺？」

突如投げかけられる質問に、思わず声の上擦るテンザ。

「お、俺はだな、えーっと、ルカと色々やる日常が楽しい……と思ってるし、えーっと……ず、ずっとこんな生活を続けたいと思う。だから……」

ルカの質問への直接的な回答にはならなくとも、それは間接的な回答としてしっかりルカに伝わる。

「う、うん……だが、ら……?」

いつの間にかルカの顔も真っ赤になって、顔をつき合わせているわけでもないのに、落ち着き無く視線を彷徨わせている。

「お、俺、俺と……」

言っただ、俺。

テンザは心の中で自らを鼓舞し、小さな箱をぎゅっと握り締める。

「俺……と……」

ポケットから箱を掴んで出るはずだった右手は、よろよろと何も

掴まずに抜け出た。

それと一緒に、言おうと思っていた言葉も抜けて消えていく。

「燃えて……る？」

口を開いたのはルカだった。

そう、マシンから見下ろす景色が、紅く染まっていた。

燃えているのだ。サトウールの隣町が。

それが何を意味するのか、わからぬほど若い二人ではなかった。

「時間……切れかよ……」

そのまま魂まで抜け出ていきそうな落胆、絶望のテンザの呟きは、ルカの耳には届かなかった。

通じ合う二人の日々（後書き）

最初短編ものとして書いたんですけども、丁度三つに区切れたので、連載ものということと三つを一気に投稿しました。

少年と、女の子

起こってないのに、何で？

少年はただただ首を傾げるばかりだった。

しかし少年が次に口を開くよりも前に、女の子は少年の手を掴んだ。

「行こっ」

どこへ？

その疑問は言葉にされることなく、少年の頭の中だけで反芻する。女の子に手を引かれてたどり着いた先は、施設の裏にある自動販売機だった。

知ってる、これはお金を入れたらジュースが出てくるものだ。

でも、どうしてこんなところに？

疑問だらけだった。

「えへへ」

戸惑う少年をよそに、女の子は歯を出して笑い、ポケットから二枚の硬貨を取り出して、それを自動販売機の中へ。

そして背伸びして、同じボタンを二回押す。

ガラン、ガラン、と、二つのビンが出てきた。

それを取り出すと女の子は、片方を少年の方に差し出した。

「はい、あげる」

少年は「ありがとう」と小さく言って、わけもわからぬままそれを受け取った。

二人で近くの段差に腰掛けて、ビンの中身の清涼飲料水をチビチビと飲む。

「おいしいね」

そう女の子に言われ、

「うん」

と正直に少年は返す。

そしてそれに続けて、少年は聞いてみた。

聞きたいことはたくさんあるけど、まず一つ。

「どうして、ぼくにこんなことをしてくれるの？」

すると女の子は、笑って言った。

「あたし、パパとママが事故でいなくなっちゃって、今日からこゝで暮らすことになったの」

何の話だろうと思ったけど、少年はそれを黙って聞いた。

「これからの生活、一人ぼっちはいやだから、あなたとお友達になろうと思ったの」

「ともだち？」

「そう。誰かのために何かをしてあげたいと思うことが優しさで、優しい人にしか友達は作れないの」

「やさしさ？」

「さっきのお兄ちゃんたちは、大きいだけで、優しさがあるように見えなかった。でも、あなたには優しさがあるかなーと思ったから」

「ぼくに？」

「うん、だから、お友達になるっ」

無邪気に微笑んで、手を差し出す女の子の言葉が、無性に嬉しかった。

ぼくはその時初めて、辛い時以外に涙を流した。

そして、全ての疑問が片付いたんだ。

この女の子は優しい女の子で、ぼくを友達にしてくれようとしてるんだ。

ただ、それだけだったんだ。

急に泣き出すぼくを慌てて励ましてくれる女の子の言葉や行動もまた嬉しくて、嬉しくて、ぼくはずっと泣いていた。

泣きながら、手を握り返した。

「ともだ、ち……！」

ぎゅっ、と、握る手に力をこめる。

「つ、強く握りすぎだつてばあ」

女の子のその言葉にハツとして、ぼくは力を弱める。

お互いに名前を言い合った後も、少年は湧き出す喜びを何とか表現したくて、頭の片隅から、古い情報を引っ張り出してきた。

「あ、あのさ、ビンのふたちょうだい」

「ふた？ いいよ、でも何に使うの？」

女の子から少年はビンのふたを受け取って、親指でグイグイ押し、真ん中の部分をくりぬいていく。

そして自分のもくりぬく。

真ん中をくりぬかれたビンのふた達は、二つのギザギザなリングになった。

そしてその片方を、少年は女の子にプレゼントした。

「はい、どーぞ」

「なにこれ？」

女の子が受け取ったソレを、ものめずらしそうに見ている。

「え、えっと、指輪。男の子が大切な女の子に渡すつて、何かの本で読んだんだ」

そう言つと、女の子は急に顔を赤くした。

「も、もう！ それは、好きな女の子に渡すものよ。あたしたちは友達でしょ？」

「え、ぼ、ぼく、君のこと好きだよ」

「だーかーらー、その好きとは違うのー！」

よくわからない、好きだけど好きとは違う？

喜んでもらえると思つて渡したのに、怒られてしまった少年は、思わず涙ぐむ。

「あっ、ちよつと、泣かないでよお。あのね、も、もしあたしたちがそういう関係になつたら、その時に渡して」

「そ、それつていつ……？」

「わ、わかんないよそんなの……」

「うう……」

「で、でも！ いつか必ず来るから！ 相手はあたしじゃないかも
知れないけど、指輪を女の子にプレゼントする日は絶対来るから！
その時まで、大事にとつといて、ね？」

「……う、うん。わかった」

返されたギザギザのリングを、自分のと合わせて二つ。ポケット
に少年はしまった。

その日から、少年はいじめられなくなり、かわりに女の子と過ご
す楽しい日々が始まった。

読書コーナーの絵本や図鑑を二人で眺めたり、空を飛びたいとい
う女の子の願いで、ジャングルジムのてっぺんに登って空に手を伸
ばしたり。

大人たちに隠れてお菓子をつまみ食いしたり、お絵かきしたり、
それはもう楽しい日々だった。

いつしか少年は、女の子が最初に言っていた、優しさというもの
を理解出来るようになっていた。

けれど、そんな幸せは長く続かなかった。

ある晩のこと、トイレに起き出した少年は聞いてしまったのだ。

大人たちが、女の子をどこか遠くに渡すと話しているのを。

人体改造なんて、ヒーローものの悪役みたいな台詞も出てきた。

危ない！ そう思った少年は、大人たちが話し合う部屋に意を決
して入った。

そして開口一番に、こう言った。

「ぼくが、代わりになる！」

大人たちはびっくりしてパタパタしてたけど、少しして、「確か
に、年齢は同じだし、それでも大丈夫か……」と、喋った。

少年は難しいことは何一つわかっていなかったが、唯一つ、一番
大切なことだけをわかっていた。

それは、

ぼくは、女の子を護れたんだ。

という、一つの誤った真実だった。
。

少年と、女の子（後書き）

深夜に一日でザザザッと書き上げましたゆえ、誤字脱字が非常に心配です。

勿論、見直しはしたのですが……ううん、不安です。
致命的なものがないことを祈ります。

真っ暗な世界でただ一人、お前だけが優しかったから

二人は、テンザの自宅に戻ってきていた。

テンザのポケットには、依然として小さい箱が入っていたままだった。

「な、何かすごいもの見ちゃったね……」

何とか作った笑顔で、ルカが言う。

「ん……だな」

テンザは自室の戸を掴んだ。

「ちよつと、ついてきてくれるか？」

そして、背にいるルカに向かって言う。

「え、うん。もちろん」

テンザはルカを連れて、自宅の奥にある作業部屋へと入る。

「あー、ここに入るのって久しぶりかも……」

物珍しげに部屋のあちこちを眺めるルカを置いて、テンザは何も無い壁に手を当て、グツと押し込む。すると、

「わわっ、からくりトビラ!？」

壁がぐるりと半回転して、奥への道を示していた。

テンザは懐中電灯をつけ、暗い洞窟のような道を進んでいく。

「うわー、すっごーい。これなに？ テンザが作ったの!？」

「ああ」

すっかり探検気分 of ルカに対し、テンザはどこか緊迫した表情。そしてしばらく歩くこと数分。

洞窟の奥に待っていたのは……

「壁?」

ルカが口にした通りのものが待っていた。

無骨な鉄の壁。しかし、どこか見覚えがある。

「これはただの壁じゃない。わからないか?」

テンザにそう言われ、うぐんと考えるルカ。やがて、

「あ、これって国の端にある落下防止の……」

そう、洞窟の奥に通じていたのは浮遊島国の端にあり、越えれば遙か地上へ落下する壁だった。

「実はこの壁も……」

テンザが壁を押し込むと、先ほどのからくりトビラよろしく、半回転してみせた。

「ええっ!? これって、かなりかたーく出来てるんじゃないの!?」

「うん、これはかなり手こずった」

少し誇らしげなテンザ。

「で、この先には何があるの？ まさか、ヒューンって落下!？」

「そんなわけないだろ。ほら、道は続いているわけだし」

テンザは懐中電灯でトビラの奥を照らしてみせる。

「ホントだ……って、どうゆうこと?」

「実はこの先は……船の内部に通じてるんだ」

「ふえっ? どうゆうこと?」

「ああ、勿論船と言ってもただの船じゃあない。空飛ぶ船だ」

「空飛ぶ船え!?! なにそれカツコイイじゃない! い、今から早速飛んでみようよ!」

スケールの大きな話に、ドキドキと胸を高鳴らせるルカ。

しかしテンザは苦い表情をしている。

「んー、乗せて飛んでやりたい気持ちは山々なんだが、残念ながら燃料が片道分しかない」

「片道……分?」

「ああ、その通りだ。この船は、一度エンジンをかけると、燃料が切れるまで空中移動をやめない。そして、ピツタリ隣の平和な移民の大国、『テントル』でゆっくりと着陸するようになってる」

「ど、どうゆうこと?」

深刻な顔で話すテンザに、ルカも少し切迫して質問する。

「ルカも見ただろ？ この国はもう終わりだ。となれば逃げ出さないと。どこか安全なところへ。幸い、隣国は移民の受け入れに寛大なテンタルだ。少し遠いが、ちゃんと計算はした。今積んである燃料でちゃんと到着するハズだ」

「……………」

テンザの説明を受け、ルカは真剣な表情のまま船の中へと足を踏み入れていく。

そして船内の階段を上り、甲板へ。

「かなりの大型船じゃないこれ」

「ああ、ちゃんと人数分耐えられるように作った」

当たり前だが、これが二人乗りの船であるハズはない。

つまるところ、その意味することは……………。

「町の人たちをみんな乗せて出発するってこと？」

「そうだ」

信じられない……………と、ルカは思った。

最も付き合いの長い自分ですら、何をしているのか分からないテンザの機械弄りは、こんな意味のある先を見据えた行動だったのだ。

しかも、自分を忌み嫌う町人たちを救う用意までして……………。

「ど、どうして？」

思わずルカはたずねた。

「何が？」

「町の奴ら、あんなにテンザのこと嫌ってるのに。どうして町人の分まで？」

「それは、ルカが教えてくれたんじゃないか……………」

「え……………」

疑問に疑問が重なる。

テンザの言葉がつながってこない。

「ど、どういう意味？ ごめんわかりやすく言って」

「俺に優しさがあるから……………ルカは友達になつてくれたんだろ？」

「え……………」

やさしさ？

「誰かのために何かをしてあげたいと思うことが優しさ……なんだろ？ だったら俺は、優しい人間であるために、町の人のために安全を確保しようと思う」

その言葉で、バラバラなピースになって散らばっていたテンザの言葉が、つながっていく。

「て、テンザ……あんたそんな昔のこと……」

「俺には改造だとかで連れていかれてた時の記憶がないからさ。そんなに昔のことでもないし、残ってる記憶ってのはすっごく貴重なんだよ」

そしてテンザは目をそらし、少しだけ顔を赤らめて言う。

「そ、それに……ルカとの思い出だな、うん。忘れるわけねえっつーか……その、うん」

瞬間、ルカはテンザに抱きついた。

「な、なんだよ急に！」

「ううん、何でもない。何でもないけど、今はこうさせて」

しばし抱き合った二人が離れ、再びテンザの自宅内に戻ってきたのは、それからしばらくしてからだった。

「さて、ルカに頼みたいことがある」

「大体予想がつくけど、何？ 言ってみて。今なら何でもやるわよ！」

「町の人たちに知らせてきてくれ。一人で回るのは大変かも知れんが、嫌われ者の俺が言ってもどうせ信じてもらえん」

「わかった。もうすぐこの町にも戦禍が及ぶこと。脱出できる船があるからそれに乗れば助かるってことね」

「ああ、俺の作った船など怪しくて乗れんって奴ばっかだろうが、人望あるルカの頼みなら聞いてくれるだろう。どうしても無理な時は、諦めて置いてきてくれ。それはルカのせいじゃない。」

強制出来ることでもないし、怪しいのは事実だからな。原因があるとするれば俺のせいだ」

「うん、大丈夫。あたしに全部任せて！」

「……なんか、ヤケに嬉しそうだな」

「そりや当然よ！ これでようやくあの馬鹿な町の奴らに、テンザがどれだけ優しいすごい人間かってことを教えてやれるんだから」

「……………」

面と向かってそんなことを言われては照れるしかないテンザだったが、すぐに思考を切り替え、

「俺は自宅でしなきゃいけないことがあるから、今から六時間以内に、説得出来るだけの人を連れてきてくれ。それ以上遅くなると間に合わない」

「六時間！？ そりやまた短いわね……………」

「毎度一つの町単位で敵国のみなさんは侵攻してくる。その周期と、船の速度を考えると、それでもしないと間に合わない。本当は、もっと早くにしたいところだ」

「わかったわ……………」

ルカは、またしてもテンザの言葉に驚いていたが、そう何度も驚いて聞き返している場合ではない。

急がなければならぬということとは十分に伝わってきた。

「悪いけど、走って行ってくれるか」

「了解よ！ テンザの家まで来ればいいのよね」

「ああ、それで問題ない」

「「じゃあまた、六時間後に」」

二人は揃って再会を約束し、別れた。

ルカは町を目指して走り、テンザは自宅の作業部屋へ。

カチカチと、テンザはパソコンのキーボードを叩いていた。

画面に表示されているのは、自作のハイパーアンテナで盗み出した自国の機密情報。

「よし、よし……これで場所もハッキリした。いける！」

テンザはパソコンを閉じると、ポケットから小さな箱を取り出した。

そしてゴーグルをかけ、それに細工をする。

細かなチップを埋め込み、特殊なロックをかける。

「んー……ま、多分これで大丈夫だな」

テンザが全ての仕事を終えたところ、丁度ルカの声が聞こえてきた。

「テンザ！ 連れてきたわよー！」

その声に呼応し、テンザは自室を出る。するとそこには……

「おいおい、すげえなお前の人望……」

なんと、テンザの知る限り町の住人全員がそこに揃っていた。

「隣町が敵軍にやられちまったつてのは聞いてたんだ」

「それにルカちゃんの言うことだから、間違いはねえかと……」

「なんか、今まで意地悪してきて悪かったなあテンザ……」

町人が口々に状況説明、あるいはテンザへの謝罪を口にする。

中には怪しんでいる者もいたが、なんとか全員連れてくることに成功したようだった。

「それじゃあ、みんな中に入れてくれ」

テンザは号令をかけ、自室の中へ促す。

町人がガラクタだらけの部屋に驚いたのは一瞬、

「一刻の猶予を争うんですよ！ 皆さん、急いでください！」

というルカの一喝にすぐさま気を取り直して、どんどん奥へと進んでいく。長い列の最後尾に、ルカとテンザはいた。

「ありがとな、ルカ。俺の大船がもし無駄になったら、それ正直悲しいからな」

「何言ってるのよ。みんな、心のどこかではテンザに優しさを持ってたつてことよ。優しさがなければ友達にはなれない、つてね」

ルカの慰めがテンザには嬉しかった。

やはり、どんな時でもルカは俺に力を与えてくれる。
ルカは俺の　大切な人だ。

「これで町の人たちは全員乗ったわよ。さ、あたしたちも乗りましょ」

ルカはそう言って作業部屋への扉あける。

テンザもそれに続く。

「えーっと、からくりトビラは……探すまでもなかったわね」

先ほどの町人たちのために、半回転された状態のままだった。

「さあ、急ぎましょ」

ルカは駆け足で洞窟内に進んでいく。

しかし、足音は一人分。自分のものしか聞こえない。

「どしたのテンザ、急がなきゃ」

ルカは振り返ってテンザを呼ぶ。

しかしテンザは黙ってこっちを見ているだけで、全く動こうとしない。

何か緊急事態が起こったのかと、ルカは仕方なくテンザの隣まで戻る。

「ねえ、どしたのテンザ」

ルカの不安そうな問い。

目の前にいる大切な人　テンザがこの不安を払拭してくれると信じて。

けれど、テンザの口から出た言葉は、ルカの最も聞きたくなかった言葉だった……。

「わるい、俺は一緒には行けねえや」

どこか恥ずかしそうにそっぽを向いて言うテンザの様子は、いつもなら好ましいものなだけけれど、

「え……どういう、こと……?」

「や、色々計算してみたんだが、どうにも船で普通に逃げたら、敵国の奴らに追いつかれる。どう考えても怪しいだろ、飛び立っていく巨大船なんて。いかにも財宝か何かありそうだ。

敵が攻めてくんののは多分三日後ぐらいだが、ノロノロした大型船の動きじゃあ、敵の戦闘機にあつという間に追いつかれちゃう」

「つま……り……?」

ルカはテンザの言いたいことを半ば理解しつつも、それを肯定しなくなくて、少しでも先延ばししたくて、聞いてしまう。

「誰かが残って足止めする必要があるってことだ」

「ど、どうしてテンザが!」

ルカの胸の内の激情が一気に爆発した。

「テンザはここまで色々なことを用意してきた。ならそんな困みたいな役目、テンザがやらなくてもいいじゃない!」

ルカの叫びの後半は、涙交じりのものになっている。

「おいおい、違う。何か勘違いしてるぞルカ」

「え?」

「俺は追いつくつつの、後からお前らに」

「どうやって!? 船で空中を移動するのよ!? 空中を移動する

手段なんて ……あ」

「今日ドライブしたろ。何のために高く飛べるようにしたか? 計算してるんだよ」

そう言っただけでテンザは笑ってみせるが、ルカはまだ納得がいかない。「でも、敵国の兵士は武器を持つてんのよ? テンザ一人でどうやって」

「それもちゃんと考えてある。実は秘策中の秘策。切り札があるんだよ」

「……でも！」

「信じてくれ、ルカ」

テンザはルカを抱きしめた。ぎゅっと、離れないように。

「でも、でも！」

ルカは駄々をこねる赤子のように泣きはらし、抗議を続ける。

「ずっと機械をいじくってた俺だが、それは船をずっと作ってたわけじゃない。秘策のために今まで時間をたっぷりかけてきたんだよ。だから俺の秘策を信じてくれ」

「……う、う……」

弱弱しく背中に回されていたルカの腕の力が強くなる。

「どうしてもってんなら、コレを持ってってくれ」

テンザはポケットから小さな箱を取り出す。

「何……これ。開けていいの？」

そう言ってルカは開けようとするが、どうやっても箱は開かない。「それはな、コンピューター制御されてて、ある信号を送れば開くようになってんだ。そしてそのスイッチは俺が持つてる」

反対側のポケットから小さなリモコンを出してみせるテンザ。

「要は、開けてみてのお楽しみって奴だよ」

「開けてみての……でしょ普通」

涙をこぼしながらもようやくやく笑顔を作ったルカは、そのまま背伸びをして

瞬間、唇と唇が優しく触れ合う。

「なっ!?!? る、ルカ!?!?」

「あたしからも贈り物ー。さあ何をしたでしょうどういう意味があるでしょう。それは、船の中であたしに会ってのお楽しみー」

ペロリと舌を出すと、ルカはそのままスタタタと走って洞窟の奥に向かっていく。

その背中が見えなくなる瞬間、ルカは振り向いて、

「信じてるから、ね」

「……おう」

そんな言葉を交わした。

……。

町の人たちと船に乗って三日後。

ルカは一人甲板の上に出ていた。

テンザの言っていた通り、船の速度はかなりゆっくりだ。これだけの人数を乗せ、これだけ大きい船なのだから当たり前といえは当たり前なのだが、今はその遅さがありがたくも思える。

敵国の奴らに見つかって襲われる危険もあるが、これならテンザのマシンなら数時間で追いついてくれる。

島を覆う壁の上、灰色の煙がいくつも立ち昇っている。

テンザの言っていた通り、敵国の侵略が始まったのだろう。

もうすでに、町は破壊し尽くされているだろう。

町を破壊し尽くした後、敵の兵士たちは当然発見するだろう。町から離れた奥に存在するおかしな建物を。

おそらくテンザはそこで切り札を用いて足止めするのだろう。

いや、ひよっとしたら町のいたるところに仕掛けを施して、もう敵国の兵士を撃退しているのかも。

今にもマシンに乗ってこっちに向かってくるかもしれない。

信じてくれと言われたんだ、信じるしか、ないよね。

ルカはあれこれと考える。明るい展開を。

ふとすれば考えてしまう最悪の結末を考えぬよう、明るい未来を
考える。

「テンザ……！」

ルカはポケットから小さな箱を取り出して握り締める。
テンザから貰った、小さな箱。

何が入ってるのかわからないという怪しさ極まるものだが、どうしてか握り締めれば不安が少し和らいだ。

ぎゅっと、願いをたくすように握り締めていると、驚くことに、その開かずの小さな箱はゆっくりと開いていった。

「え？ えっ？」

開けようともしていないのに自分から一人でに。

「あっ……」

ルカはすぐに思い出す。

そういえば、スイッチで開くものとテンザは言っていた。

これが開いたということは、テンザはまだ無事……生きているのだ。

しかしこれはどういうサインなのだろう。

今からそっちに向かう？

それともピンチだったこと？

わからない。

ルカは考えても答えの出ぬその疑問を一旦置いて、箱の中身を見
てみることにした。

ここに何かヒントがあるのかも知れない。

ルカは小さな箱の中を覗き込む。

そこにあっただのは、ひとつのくりぬかれたビンのふた ギザギ

ザの、リングだった。

「こ……これ……」

ルカは勿論覚えている。

孤児院にいたころ、一番の友達だった男の子から初対面の時に渡された、不恰好で安っぽい、それでもなリング。

少年は、テンザは覚えていて、ずっと持っていたのだ。

渡す時がくるのを。
渡せる時がくるのを。

「……あ……う……」
ルカはあふれ出してくるたくさんの感情が絡まって、何の言葉も発せなかった。

でも、このリングを、指輪をどうすればいいのかわかる。
ルカは左手の薬指にそれをはめた。
途端、涙が溢れ出してきた。
そして複雑に絡み合っていた様々な感情が一つにまとまる。

もう一度、テンザに会いたい。会わせてほしい。

子供の頃から喧嘩が弱くて、同じ歳の子にすらやられてたテンザが、たった一人で敵国の兵士に立ち向かっているのだ。

もし神様がいるなら、どうかテンザを護ってやって欲しい。
ルカは泣き崩れながらも、リングをはめた左手と右手を握り合わせて、ただ願った。

テンザ……！
その時、まだテンザがいるかも知れないサトウールの方で、耳をつんざく大爆発が起こった。

落下防止の鉄の壁を安々と吹き飛ばし、あたりは一面火の海になっている。

これだけの距離があっても爆発の音が聞こえ、炎が見えるのだ。
どれほどの爆発であろうか。

ルカはその光景を呆然と見つめ、ただ一言……
「テンザ……！！」

そう、祈るように呟くことしか出来なかった。

.....。

ルカたちが去ってからそろそろ三日がたつ。

俺は自作の電波アンテナで盗み出した自国の機密情報を確認しながら、呼吸を落ち着けていた。

運があつた、と、テンザは思っていた。

もし自国の機密施設が敵国の兵士に見つかり、俺が盗み出す前に何もかも破壊されてしまっていたら、この計画はうまくいかなかっただろう。

だけでもう、全ての準備が整つた。

あとは、敵国の兵士がここにやってくるのを待つだけだ。

その短いであろう時間を、俺は何をして過ごそうか。

テンザはしばらく思索して、何かを思い立ったように立ち上がった。

そして、一つのタンスの前で立ち止まる。

その周りだけ機械の部品が置かれていない。

ルカのタンスだった。

中から、一着の服を取り出す。

それは勿論女ものの服で、テンザのものではなく、ルカのものだ。

テンザはそれを抱きしめた。

ルカのにおいを感じる。

極度の緊張が急速に和らげられていく。

「会いてえなあ……」

こんな変態チックなことをしていることがルカにバレれば、それはもう怒られるだろうし、ひょっとしたらしばらく口をきいてくれないかもしれない。

でも、問題ない。もうここに戻ってくることはないのだから、証拠隠滅というやつだ。

思う存分、リラックスさせてもらおうとしよう。

緊張していても、成功する策も成功しない。

一世一代の大勝負なのだから、せめてリラックスぐらい、これぐらいの罪には目を瞑ってくれ、なあ、ルカ。

テンザはルカの服を抱いて、そのまま眠りに落ちた。

そしてテンザが、次に目を覚ましたのは、断続的に起こる爆発の音。

いよいよ、町への侵攻が始まったらしい。

「さてと……最後の準備にとりかかりますか」

テンザはルカの服を首にマフラーのように軽く巻きつけ、立ち上がった。

自分の部屋にある機械の部品をガシャガシャと隅っこによせ、食卓の椅子に座った。

食卓の上には、料理ではなく様々な物が置かれていた。

床を綺麗にしたかわりに、しわ寄せをくうように食卓の上が散らかっていた。

「ふう……」

テンザは食卓の上に置いてあるペットボトルのふたをあけ、中の水を入飲み。

「さあ、いつやってくる？」

テンザがそう口にしてから、見知らぬ男たちがここへ乗り込んでくるまで、そう時間はかからなかった。

「ん……おい、お前は誰だ！」

テンザの家に入ってくるなり男たちの一人がそう口にした。

「人の家にずかずか入り込んできておいて、誰だつてのはいないだろ。まずお前から名乗れよ。名乗らなくてもいいけど」

無論、男たちは敵国の兵士であった。
皆がライフルのようなものを持っている。

「この町だけ人っ子一人いなかった。お前何か知っているのだから！」

テンザの言葉を無視して、男はライフルをテンザに向けたまま話しかける。

「さあ、何のことかね」

テンザは白を切るが、男たちは余裕の顔を崩さない。

「まあ、お前が何も喋らなかつたとしても、我々はお前を殺して勝手に搜索を続けるだけだ」

「へえ」

「しかし我々もあちこち探し回るのは正直言つて面倒くさい。だからどうだ？ 取り引きといかないか？」

「……どんな？」

全く取り引きをするつもりもない、ふざけた顔で男は口にした。

「もしお前が逃げた奴らの居場所を我々に教えれば、お前だけは助けてやるわ」

「寛大な条件だな」

「そうだろう？」

守る確証も何もない適当な取り引き。テンザに選択権がないのを知って男たちは迫る。

「だがお生憎様、俺は今度こそ護らなきゃならん人がいるんでな、その条件には乗れねえわ」

テンザは毛ほども悩んだ様子のない顔で、キツパリと言った。

その反応に、男たちは一瞬だけイラついたような顔になったが、すぐに不気味な笑みを浮かべなおし、ライフルを改めてテンザに向けた。

「そうか、残念だ。ならお前には死んでもらおう」

四人ほどれる男たちのライフルは、どれもがテンザへと真っ直ぐ向けられている。

「こわいこわい、四人がかりでしかも銃持ちかよ……でもな」
幼い頃、憎い奴らもみんな銃があれば殺せると思っていた。
でも、相手も銃を持っていればどうすればいい？

答えは至極単純な話だ。

こっちはそれを全て上回る、もっともつと強力な武器を用いれば
いい！

「俺だつてガキのまんまじゃねえんだよ！」

テンザはポケットから小型の銃を取り出して、その銃口を向ける。

自分の頭に向かって。

予想外の行動に、男たちは怪訝そうな顔をする。

そんな男たちを見て、テンザはニヤリと愉快そうに笑う。

「どうした？ 俺の頭がおかしくなったとも思っているのか？」

テンザの言葉通り、テンザの行動は頭がおかしくなった人間の行
動のようにしか見えない。

「お、お前まさか、情報を知る自分を人質だとか……そんなふざけ
たことを」

「言うわけないだろ。俺が話すのは、どっかの馬鹿でくだらねー国
のお話だ」

何を言っているんだという風に、ますます困惑の色を深める男た
ち。

しかしそんな彼らをおいて、テンザは話し始める 自分の国の
国家機密情報について。

「この国はな、お前ら敵兵をぶっ飛ばすために、ある秘策を考えつ
いたんだよ」

「秘策だと？」

四人の中で一番冷静な男が聞き返す。

「そう、秘策……それはわかりやすい言葉で言えば人体改造と呼ば
れるシロモノだった」

「人体改造だと!?!」

男たち四人が一斉に驚く。

「しかもそれはそれは聞くも恐ろしい改造。なんと、人間の中に超高密度の爆弾を入れて、歩く特攻爆弾として突撃させるものだった」

「な、なん……だと……?」

「恐ろしいよなあ、向かってくる兵士を撃ち殺せばなんとその場で大爆発。かといって攻撃してくる奴を無視するわけにもいかない」
「っ……………」

テンザが語る信じられないような話に、男たちは言葉を失う。

「でもな、その人体改造実験は失敗したんだよ。どうしてだと思っ?」

テンザは問いを投げかけるが、当然答えは返ってこない。

「くく、答えは簡単。なんと体の中に入れるための爆弾の破壊力が強すぎたんだ。これだと味方にも被害が及んでしまう……とな」

テンザは自嘲するように恐ろしい笑みを浮かべる。

「ははは、笑っちゃうよな。最新の技術を誇る軍のトップ、最高峰の技術を持つ奴らが、火薬の量を間違えた、だぞ? まさに愚の骨頂だ」

ひとしきり笑つと、テンザは目を剥いて話を再開する。

「だけどよお、一つだけもう作っちゃった後だったんだよな。爆弾の破壊力が強すぎることに気づいたのは

だからこの世に一人だけ生まれちゃったんだ。体の中に超高密度の爆弾を忍ばせる改造人間がな」

テンザはそこまで言つと、声高らかに宣言する。

「しかし軍はそれを廃棄しなかった。何かのためと思ったのかね、自殺などさせぬよう記憶を改ざんし、大金を握らせ世に放つたんだ!」

テンザの話はどんどんヒートアップし、逆に圧倒的有利にあった男たちが、及び腰になり始めている。

「だが、火薬の量を抑えた爆弾を製作する前に敵国……お前さんら

に追い詰められた内の軍のトップたちはそれどころじゃなくなり、遂には死亡。後には哀れな改造人間だけが残った」

テンザはそこで水を一口飲んで一呼吸つくと、両手を大きく広げて再び話し始めた。

「今から、その改造人間の特徴を教えてやろう。歳は二十歳前くらいの青年で、性別は男、背丈は……そうだな、くくく、これくらいだ」

そう言って自分の頭の上に片手を置くテンザ。

「それからそれから、声はこんな声で、趣味は機械弄り、好きな女の子はルカ、サトゥールの町の隅に住んでいて、今現在敵国の兵士と相対して……それからそれから！」

兵士たちはもう完全に戦意を喪失し、尻餅をついていた。

あり得ない話だと思いつつも、テンザの一挙手一投足、一言一言を見るたび聞くたびに、それが真実なのではと感じてしまうのだ。

それは当たり前な話。何故ならテンザは一切の演技などなく、真実を話しているのだから。

巧妙なウソに、少しの綻びはあるかもしれないが、完璧な真実には綻びなど存在しない。

「ああそうだ。これは三日前によくGETした情報。どうやらその改造された人間。爆弾は　頭の中に埋め込められているらしい」

そう言うや否や、自分の銃を自らの頭に強く押し付け、壊れたように笑うテンザ。

男たちは、銃を投げ捨て今にも逃げ出しそうだったが、そうは出来なかった。

テンザの話、剣幕に腰が抜け、足が竦んでしまっているのだった。

「ん？　そんなに俺の話が楽しかったかい。じゃあ最後に、もう一つだけ話をしてやろう」

テンザは銃を机に置き、椅子にどっかりと座って、深呼吸した。

明らかに空気が変わる。

さつきまで四人の屈強な男たちを脅しつけていた人物と同一とは思えない。

何の力もない、ただ一人の青年の顔で、テンザはゆっくりと口を開く。

「哀れな、少年のお話だ」

凍りついた室内に、テンザの声がしつとりと響く。

「どっかの馬鹿な組織に、大切な人の身代わりにと行って連れて行かれた少年は、そこでされたことに関する記憶を失った。

気がつくと自分は身長だけが伸びていて、どこともわからぬ場所にいた。

当たり前だ。連れて行かれてからの記憶を消されていたんだから、どこで解放されたかなんて道順も覚えていようはずがない。現在地もわからない。

どうしようかと思って両のポケットを探したら、片方には大量のお札。もう片方には、連れて行かれる前と同じ、くりぬかれたビンのふたが、二つあったんだ。

それを見ただけで体が青年の少年は、頑張ろうと勇気が湧いた。そのビンのふたは大切な人との思い出の品だったんだ。

少年は歩いた。時にはお金を払って車に乗って、ただひたすらに故郷を目指した。

そして、長い時間をかけてたどり着いた故郷。最初に見たのは大切な人の泣いている姿だった」

テンザは立ち上がり、壁越しにどこか遠くを見据えるようにして話を続ける。

もうそれは、男たちに対してではなくなっていた。

吐き出すように、自分の思いを吐露していった。

「俺は彼女を護れたつもりでいた。でもそんなこと全然なかったんだ。俺はいなくなり、彼女を独りにしてしまったんだ。

だから俺はその時決意した。これからは、ずっと彼女の傍を離れ

ないでいようと。

故郷の町に戻った俺は、町の人から煙たがられ、国のスパイだと忌み嫌われた。

でもそんなこと俺にとって全然関係なかった。自分の帰りを心の底から喜んでくれる彼女がいたから。

俺は町の外れに家を作つて、そこで毎日のように機械弄りを始めた。

空を飛びたいと言っていた彼女のためにマシンを作ったり、自分が数年間一体何をされていたのかを知るために国家機密を探ったりもした。

そして衝撃の事実を知つたりしながらも、彼女との何でもない時間を過ごす内に、俺は彼女を大切に想う気持ちがどんどん膨らんでいくのを感じた」

テンザはポケットから小さな箱を取り出した。

そしてそれを、ぎゅっと握り締めた。

「それで、俺はルカに告白しようとしたんだ。

好きだ。って。愛してる。って。こっ恥ずかしくて中々言い出せなかったけど、ようやく言えそうな機会に出くわしたんだ。

だから俺は、この国の滅びを感じながらも、ギリギリまでルカと、幸せな日々を過ごすため。

告白しようと、した。

だけど……その直前見てしまった。もう、ギリギリを通り越して間に合わない時間まで来ていることを……」

そこでテンザの両目から大粒の涙が零れ落ちた。

一度流れ始めた涙は、もう止まることなく、いつまでも流れ続ける。

嗚咽で言葉をつまらせながらも、確かにテンザは言葉をつむいでいく。

「天は俺に、ルカと愛し合う時間を、くれなかった。時間切れ。無常なまでの宣告。俺は……ルカを、また、独りに、うっ……ぐうっ

……！」
テンザは机の上にあるスイッチを叩き割るような勢いで思い切り押した。

握られていた小さな箱が開く。中には、ギザギザのリング。

今日までずっと持っていた、大切な人に贈る 結婚指輪。

それをテンザは、迷いなく左手の薬指に通した。

「ああ……ルカ。お前も今これをつけてくれてんのかな？俺たちは愛し合う……指輪を贈ってもおかしくない関係になれたのかな？」

テンザ両手を地面について、号泣した。

首に巻いていた彼女の服の香りを、わけがわからなくなるほど求めた。

「逢いたい、逢いたいよルカ。ごめん、約束守れなくて。でも、お前を護るにはこうするしかなくて」

もっと温もりを確かめ合いたかった。

ようやく、想いが通じ合っているのを確認できたのに、華奢で柔らかいルカの体を、抱きしめたかった。

綺麗な唇の感触を、しっかりと味わいたかった。ルカの笑顔を見たかった。ルカの料理を食べたかった。

ルカと一緒に、もっともっと空を飛びたかった。ルカと……ルカ、と……っ！！

「だけど、さよならとは言わない。逃げた先で幸せになって、あの世で再開しよう。一足先に……待ってるからな」

テンザはよろよろと立ち上がり、たどたどしい手つきで机の上にある銃を掴んだ。

男たちが動けないままに、大声をあげて制止するが、もうテンザの耳には届いていなかった。それどころか、男たちの姿がテンザには見えてすらいなかった。

テンザの目には、愛しい大切な人の、ルカの笑顔が見えていた。テンザは黙ったまま銃口を自分のこめかみに突きつける。

このまま引き金を引けば、この家は勿論サトゥールの残骸はおろか。この国の半分を吹き飛ばすほどの大爆発が起こるだろう。

当然、敵軍は船一つを追いかけるところじゃなくなる。

「俺はただ、ルカを死なせたくないだけで、残されるルカのことをちつとも考えてない、昔とおんなじことをしようとしているのかもしれない……」。

でも、それでも……ルカを死なせることなんて、出来ないよ」

数年間の記憶が消えている俺は、孤児院にいたころから実は少ししか歳月を生きていない。だから、まだ馬鹿なままなのかも知れない。ちつとも変わってないのかも知れない。

ふと、残されたルカの泣き顔が浮かんだ。

「ルカが、泣いて……る……」

どうして？ 俺が死のうとしているから？

泣き顔なんて見たくないよ。笑ってくれよルカ。

「ルカ、お前は俺のことを大切に想ってくれているんだろ？ 俺も

同じなんだ。だから、だからさ……」

テンザは自分の頭の中にある無数の言葉の中から、一番ルカが喜んでくれるであろう言葉を選んで、口にした。

「ルカ、結婚しよう」

そして少年は、引き金を引いた。
。

真つ暗な世界でただ一人、お前だけが優しかったから（後書き）

……はい、お疲れ様でございました。

一応連載もの初完結になるので（一気投稿ですが）感想とか楽しみだったりします。

予想外に切なさ炸裂でテンション下がったじゃねーかコリアー！という方は、是非私の拙作「草食男子も肉を食う」を！ ゆるすぎてふわふわ出来ますヨ。

シリアスいいよいよーな方は「この争いの絶えない世界で」「シリーズの「流浪集」をドゾ（宣伝じゃねーか

ええと、また機会があればお会いいたしましょう。それでは

ヒラヒラ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0814z/>

不器用な二人

2011年12月3日00時48分発行